

2004年度3学年国語 1学期中間考査

この問題用紙はファイルにとして保存すること。(とじていない場合はファイル提出不合格となる。)

字は丁寧に濃く書くこと。極端なくせ字、汚い字、読みとれない字の場合は減点の対象になる。

文章を書くときには句読点「。」や「、」を絶対に忘れないこと。ついてない場合は減点の対象になる。

次の文章について後の問いに答えなさい。

人間には大きく分けて二つのタイプがあるように思われる。一つは、(A)を押しのけてまで(ミズカヲ)を目立たせようとする出たがりのタイプであり、あと一つは自分の存在を(A)の陰に隠してしまう引つ込みのタイプである。一方は押しの一手で突進する型で、他方はいわば引きの姿勢で後ずさりする型の人間である。

出たがり屋が目立つのは、対称性と平等性に裏打ちされた個人志向の価値前提を(ミ)信奉する「わたし」の文化である。独立独歩の「一匹狼」が幅を利かす文化でもある。反対に引つ込み屋が優勢なのは、他者との調和を重視する補完性に立脚した集団志向の文化価値が尊重される「わたしたち」の文化である。「匹狼」というよりはむしろグルーブ プレーヤーが大事にされる。

出たがりであるか引つ込みであるかは、それぞれの文化のメンバーが自己をどのように見るかで決まる。アメリカ人と付き合っていると、彼らが自己を人間関係の中心点、行動の準拠点と見なし、自らの行動をいつも他者に先駆けて行おうとする気質が(ミ)オウセイであることに驚かされる。自己を外に向けて拡大、拡張しようとする傾向が強い。これに対して日本人は、他者との人間関係の中に自己を(ヒ)マイボツさせて、あまり公的に自分を(ミ)表出させないことに美学を感じる国民のようなだ。自己をどの程度外に向かつて出すか、あるいは自己を内に隠して外に出さないかは、文化によって違いがある。

自己の公的性、私的性と異文化コミュニケーションとのかわりに最初に注目したのは、D「バーランド」というアメリカのコミュニケーション学者である。彼は「公的自己」と「私的自己」という二つの「鍵概念」を提示して、自己を他者に開示する程度には文化によって違いがあると仮定して、日本人とアメリカ人を調査対象にして、実証的な研究をした。

バーランドは次のように仮定した。対人コミュニケーションの参加者の一方が自己のうちで他方に開示してもよいような部分を公的自己の領域、自己のうちで他者に開示するかどうかは自己の置かれた状況、雰囲気、ムードによって決まるような隠された部分を(B)「自己の領域」それぞれが意識していない部分の自己を無意識領域とそれぞれ定義して、コミュニケーションの状況により各人はこれらの領域を他者への程度開示するかを決めると言う。

アメリカ人は公的自己に価値付けしているために、コミュニケーションでは自己を外に出して徹底的に相手に迫っていく傾向が強いのではないかと、バーランドは仮定している。これとは対照的に、日本文化では私的性に高い価値が置かれているので、コミュニケーションでは公的自己を(ミ)オサえてなるべく自分を外へ出さないようにして、他者とのよい人間関係を維持しようと努めていると言う。

公的自己を全面に押し出す出たがりタイプのアメリカ人と私的自己を重視する引つ込み型の日本人とは、そのコミュニケーション形式でどのような違いがあるだろうか。まず、アメリカ人はコミュニケーションの相手をえり好み()、だれとでも、かつ数多くの人と気楽に付き合う傾向が()。見ず知らずの人でも、あまり気にせずコミュニケーションができる。また、相手がだれであるかによって、コミュニケーション形式を変えるような()、常に形の一貫性を保っている。これに対して日本人は相手のえり好み()、()とは心を開いてコミュニケーションをしたがらない。知った人とのコミュニケーションに限定しておけば、自己開示をして公的自己を出さなければならぬ。このような危険性から、身を守ることが()からである。

出たがり屋は、儀式とか規則に縛られない自由なコミュニケーションを()。形式にのっとったコミュニケーションは、自己を外に開示する妨げになるものとの見方が強いからである。反対に引つ込みタイプの人は()コミュニケーションが苦手で、規則、形式にのっとった()コミュニケーションのほうが、心に落ち着きを与えてくれるようだ。対人関係で公式性という「裏に隠れば、自己を他者に明かす程度を抑えることができるのである」。

アメリカ人はいろいろなトピックについて個人的な見解、感情をもるに相手にぶつける傾向が強い。これとは対照的に日本人は個人的な感情、意見をストレートに相手に出すようなことはせずに、()なコメントに終始して、自己の内面をなるべく相手に表出しないように配慮している。会話の素材としては、自分の内面のことよりはむしろむしる自分の外にある「外的事項」を取り上げて、なるべく自己が公的に出ないようにガードを固くしている。

問一、——部(ミ)の漢字はその読み方をひらがなで、カタカナは漢字に直して記しなさい。(漢字を書く時、送りがながある場合は送りがなも含めて記すこと。)

問二、(A)には、文中に使われている同じ二字熟語が入る。文中より抜き出しなさい。

問三、——部「対称性」について、
(1)この語と最も近い意味の語句を次から一つ選び、記号で答えなさい。
(2)この語の反意語を次から一つ選び記号で答えなさい。

- | | | |
|----------|----------|-------------|
| (ア) 個人志向 | (イ) 平等性 | (ウ) 価値前提 |
| (エ) 信奉 | (オ) 独立独歩 | (カ) 幅を利かす文化 |
| (キ) 補完性 | (ク) 立脚 | (ケ) 文化価値 |
| (コ) 公的性 | (ク) 私的性 | |

問四、——部の語や表現について、それらの語や表現を使わず、別の言葉で言い換えなさい。
問五、(B)に入る二字の漢字を記しなさい。
問六、()、()には、それぞれ何が入るか、選択肢から選び記号で答えなさい。

- | | |
|------------|------------|
| (ア) して | (ア) 強い |
| (イ) せず | (イ) 弱い |
| (ア) ことをして | (ア) 強く |
| (イ) ことはせずに | (イ) 弱く |
| (ア) 知っている人 | (ア) できる |
| (イ) 見知らぬ人 | (イ) できない |
| (ア) 好まない | (ア) 自由な形式の |
| (イ) 好む | (イ) 儀式性の強い |
| (ア) 自由な形式の | (ア) 個性的 |
| (イ) 儀式性の強い | (イ) 没個性的 |

次の文章について後の問いに答えなさい。

非言語動作の使い方にも、出たがりタイプと引つ込みタイプとでは違いがある。公的自分を開示する出たがりのアメリカ人は、言語とともに非言語チャンネルも(ニ)クシして自己を相手にさらけ出す傾向が強い。体を強烈に動かし、大きなジェスチャーを使って、時には相手への身体的な接触を試みて、自己をアピールする。これとは **タイショウ的**に、喜怒哀楽を出さないことが文化的な美德だと、小さいころから教え込まれてきた引つ込みタイプの日本人には、対人コミュニケーションで非言語を通してあまり感情を出さないことが良しとされている。**能面的な表情**が日本人の典型である。多様なチャンネルにあまり頼らないでいれば、それだけ自己を外に開示せずに済むのでは、との意識がどこかで働いているからである。

最後に、コミュニケーションで相手から存在を(ニ)脅かされた場合、その対応の仕方にも興味あるタイショウが見られる。アメリカ人は相手から言葉で挑戦されれば、言葉でもって積極的に対応するように小さいときから教えられている。徹底的に言葉で返し、自分の公的自分を相手に知らせることによって、最後には互いが理解し合い、(ニ)キョウイが解消するものだと考えている。言葉の(ニ)脅しには言葉でもって返すという言語習慣である。これに対して日本人の場合は、相手から言葉で挑戦されると、言葉で反撃するというよりは自己の内に引つ込んで、防衛的になる傾向が強い。「長いものには(ニ)A」式のメンタリティーが支配的である。

現在のような異文化化の時代では、出たがり一方の性格では異なる文化背景の人からは出しゃばりだと思われかねないし、反対に引つ込みはそういう性格だから仕方がないといつて、内にこもってばかりいれば、(ニ)ウチキ過ぎると言われかねない。やはり公的自己と私的自己のバランスをどこかで取って、異文化コミュニケーションに対応しなければならぬのが時代の要請である。

問一、――部「非言語動作」の具体例を文中より一つ抜き出し、文中以外から一つ考えて記しなさい。

問二、――部「タイショウ」を漢字に直すと次のどれになるか、一つ選び記号で答えなさい。

(ア) 対称 (イ) 対照 (ウ) 対象 (エ) 大将

問三、――部「能面的な表情」とはどのような表情か、解答欄に合うように文中から漢字四字を抜き出して入れなさい。

問四、――部(ニ)～(シ)の漢字はその読み方をひらがなで、カタカナは漢字に直して記しなさい。

問五、(ニ)Aに入る語を記しなさい。

次の文章の――部の読み方を現代仮名遣いでひらがなで記しなさい。

日もいと長きにつれづれなれば、夕暮れの(ニ)いたうかすみたるに紛れて、かの(ニ)小柴垣のもとに立ち出で給ふ。人々は歸し給ひて、(ニ)惟光朝臣とのぞき給へば、ただこの(ニ)西面にしも、(ニ)持仏据衆奉りて行ふ、尼なりけり。(ニ)簾少し上げて、花奉るめり。中の柱に(ニ)寄りゐて、(ニ)脇息の上に(ニ)経を置きて、いと悩ましげに読みぬたる尼君、ただ人と見えす。四十余ばかりにて、いと白うあてに

やせたれど、つらつきぶくらかに、まみのほど、髪のうつくしげにそがれたる末も、なかなか長きよりも(10)こよなう今めかしきものかなと、あはれに見給ふ。

(ニ)清げなる大人二人ばかり、さては童べぞ出で入り遊ぶ中に、十ばかりにやあらむと見えて、白き(ニ)衣、(ニ)山吹などのなえたる着て走り來たる女子、あまた見えつる子どもに(ニ)似るべうもあらず、いみじく(ニ)生ひ先見えてうつくしげなるかたちなり。髪は(ニ)扇を広げたるやうにゆらゆらとして、顔はいと赤くすりなして立てり。

尼君「何事ぞや。(ニ)童べと腹立ち給へるか。」とて、尼君の見上げたるに、少しおぼえたるところあれば、(ニ)子なめりと見給ふ。女子「すずめの子を(ニ)犬君が逃がしつる。(ニ)伏籠のうちにこめたりつるものを。」とて、いと(ニ)口惜しと思へり。このゐたる大人、「例の、心なしの、かかるわざをしてさいなまるこそ、いと心づきなけれ。いづ方へかまかりぬる。(ニ)いとをかしうやうやうなりつるものを。からすなどもこそ見つけくれ。」とて、立ちて行く。髪ゆるるかに、いと長く、めやすき人なめり。(ニ)少納言の乳母とぞ人言ふめるは、この子の(ニ)後見なるべし。

尼君、「いで、あな幼や。言ふかひなうものし給ふかな。おのがかく今日明日におぼゆる命をば何ともおぼしたらで、すずめ慕ひ給ふほどよ。(ニ)罪得ることぞと、常に聞こゆるを、心憂く。」とて、尼君「こちや。」と言へば、ついゐたりつらつきいと(ニ)らうたげにて、眉のわたりうちけぶり、いはけなくかいたりたる額つき、髪ざし、(ニ)いみじうつくし。ねびゆかむさまゆかしき人かなと、目とまり給ふ。さるは、限りなう心を尽くし聞こゆる人に、いとよう似奉れるが、まもらるるなりけりと思ふにも、涙ぞ落つる。

尼君、髪をかきなでつつ、尼君「けつることをうるさがり給へど、をかし(ニ)御髪や。いとほかなうものし給ふこそ、あはれにつしるめたけれ。かばかりになれば、いとかわらぬ人もあるものを。(ニ)故姫君は、十ばかりにて殿におくれ給ひしほど、いみじうものは思ひ知り給へりしぞかし。ただ今おのれ見捨て奉らば、いかで世におはせむとすらむ。」とて、いみじく泣くを見給ふも、すずるに悲し。(ニ)幼心地にも、さすがにうちまもりて、伏し目になりてうつづしたるに、こぼれかかりたる髪、つやつやとめでたう見ゆ。

(ニ)生ひ立たむありかも知らぬ若草をおくらす露ぞ消えむそらなき

またあたる大人、げにとうち泣きて、

(ニ)初草の生ひゆく末も知らぬ間にいかでか露の消えむとすらむ